

科学研究費成果報告書「近現代日本の政策史料収集と情報公開調査を踏まえた政策史研究の再構築」(基盤研究(B)(1)、代表者伊藤隆平成15・16年度、代表者伊藤隆、課題番号:15330024)より

5. 松崎 昭一氏

まつざき・しょういち 元読売新聞社記者

日時: 2004年7月9日

出席者: 伊藤隆 季武嘉也 武田知己 梅崎修 梶田明宏 佐道明広 鹿島晶子
小宮一夫 大久保文彦 藤枝賢治 今井貞夫 西谷紀子 駄場裕司 西川誠
佐藤純子 丹羽清隆 濱田英毅 萩谷茂行 伊藤光一 埴ひろ子 高橋初恵
東中野多聞 東健太郎

伊藤 皆さん、お待たせいたしました。定刻ではありませんが、ほとんど皆さんお集まりのようなので、始めさせていただきます。

本日は松崎さんからお話を伺うわけですが、その前に、この研究会を母体にスタートいたしました『近現代日本人物史料情報辞典』が、きょう辺り発売になるそうでございます。そこで、ここに一冊持ってきてありますので、まだ見ておられない方のために回覧をいたします。たいへん皆さまには御世話になりました。ありがとうございました。

さて、本日の主題は、『昭和史の天皇』を実際に中心になって進めてこられた松崎昭一さんのお話を伺いたいと思います。『昭和史の天皇』については皆さんご承知だと思いますが、オーラルヒストリーを用い、また、口述資料だけではなくて文献資料も十分に使い、そして口述で補うと言いますか、口述もかなり正面に出ています、それで作られた最初の作品として非常に高い評価を受けているものであります。

これは最終的には30巻の本になりましたが、いまは手に入れる方法がございません。そこで、何とかしたいということで前に中央公論社と話をしたこともありまして、まだ実現はしていませんけれども、いずれこれは文庫でも何でも復刻させて、付加価値を付けるために当時のテープを少し活かそうではないか、という話をしたことがございます。

実は、読売新聞社が『昭和史の天皇』の取材テープやノート等を持っているのではないかとということで、私と広瀬順皓君でアプローチをいたしまして、いろいろ探してもらいました。最初は「ありません」というご返事をいただきましたが、なおよく調べてくださるよということでお話をしましたら、「見つかりました」ということで、かなり大量のものが出てきました。それで、見せていただいたときに目録を作りまして、「これは大事にしておいてください」というふうに申し上げておきましたところが、その相手の方が読売を退社なさるときに、「もう誰もこれに関心を持っておりませんし、責任を持って保管する人がおりませんので、あなたのところに送ります」というので、私のところにボンと送ってこれらしました。それを私が預かっておりました

が、法的な処理を何もしていないために使うこともできないということで、読売と交渉をいたしました。そこで読売が所有権を確認して、「政策研究大学院大学に永久に」という言い方でしたが、とにかく寄託することになりまして、覚書を交換いたしました。

その後、その寄託された資料を見ましたら、『昭和史の天皇』で語ってくださった方のごく一部だということが分かりました。そこで、前から松崎さんを存じあげておりましたので、「松崎さん、何かお持ちじゃありませんか？」と申し上げましたら、「いや、実は持っています」ということで、松崎さんからやはり大量のテープとノートをお預かりいたしました。その後、また追加でいただきまして、また最近も追加でいただきました。松崎さんは、この前も「これで最後だと思います」とおっしゃいましたが、きょうもまた数冊のノートをお持ちくださいましたので、まだあるかもしれませんね（笑）。

それで、読売新聞社があれだけ力を入れて一つの大きな作品を作った、これは昭和史研究の非常に重要な出発点にもなっているわけでありますけれども、それが一体どのような経緯でできて、どのように進めたのかという、それ自体を記録に残したいというのが私の考え方でありまして、それを中心になっておやりくださった松崎さんに、ぜひ語り残しておいていただきたいということでございます。松崎さんにはこれからも協力をしていただき、いろいろやろうという前向きな話もございまして、『昭和史の天皇』の後に『戦後史班』というのをお作りになって、戦後の再軍備の問題、日章丸の問題、戦後教育の問題等、これも本になっておりますけれども、そういう仕事もなさっておられます。その全体像を全部語り尽くしていただこうと思っておりますので、今日一回で終わるということではなく、お疲れになったところで多少の質問を受けて終わりと、そういう形で今日は進行させていただきたいと思っております。松崎先生、まことに恐縮でございますが、お疲れになるまでお話をお願いいたします。まず、そもそもから始めてください。

松崎 松崎でございます。よろしく願いいたします。このような専門の研究者の方の前でお話するのは初めてでございますので、かなり緊張をしております。とにかく非常にきょうは暑くて、僕が愛読している『鬼平犯科帳』を見ますと、池波正太郎さんは「夏は怖い」という表現で鬼平に語らせております。“怕（コワ）い”という字を出がけに『大漢和辞典』と白川静さんの字引でチェックしてみると、“忛”は“心”という意味なんですね。それから、“白”は“頭蓋骨”という意味だそうで、「へえー！」と思いました。ということは、こんなに暑くて怖くなると白骨になってしまう、との意味も入っているのだらうと思っておりますが、とにかく暑くて私もちょっと白骨化しているかも分かりませんが、それはひとつご勘弁いただきたいと思っております。

いま伊藤先生からお話を頂戴したように、『昭和史の天皇』のそもそもから終わりの一字を書くまでこの仕事に携わった者として、その経験をここでいろいろな形でお話をさせていただきたいと思っておりますが、私には私なりのストーリーみたいなものがもうできておりますので、皆さんから質問をいただき、それにお答えして話を進めていくのがよろしいのではないかと思います。ただ、30巻にわたる『昭和史の天皇』という本がどういう内容のものなのかということになると、名前だけが一人歩きして、内容はほとんど知られていないような状態になっていると思っております。そこできょうは、別の綴じ込みになっておりますけれども、全30巻の主な内容と、どのような

方からヒアリングをしたのかプリントしてまいりましたので、これをご参考にいただければたいへんありがたいと思います。

『昭和史の天皇』がオーラルヒストリーと深い関係があることは、皆さんもうすでにご存じだと思いますが、2年前——2002年11月9日に「オーラルヒストリー日本の場合」というシンポジウムがございまして、その中で伊藤先生が、『昭和史の天皇』について非常に簡潔にご紹介してくださっているわけです。これでオーラルヒストリーに関心をお持ちになる方は、「あっ、そういうものなのか」というようなイメージを抱いてくださったと思います。

実はこの間、まあ、不勉強と言えば不勉強なことですが、ちょうど去年のいま頃からこの年寄りがパソコンなるものをやり始めて、検索する方法なども分かってきましたので、伊藤先生からここで話をしてくれというご依頼があったときに、オーラルヒストリーという検索を試みたら、ダダダダダーッと大量な内容が出てきて、これまたびっくり仰天したわけです。と申しますのは、オーラルヒストリーという甚だ耳当りのいい、ある意味ではハイカラなこの言葉を、少なくとも日本でいちばん最初に言い出したというか、とにかく活字というメディアの上で世の中に紹介したのは、この『昭和史の天皇』だったと私は思っております。ですから、オーラルヒストリーの草創期というか、そもそもの取っ掛かりのところから始めた者からすると、あのパソコンに出てきたオーラルヒストリーの膨大な量は、まさに隔世の感と言いますか、ただただ驚きといったわけです。

昨日、テレビで相撲を見ておりましたら、千代大海は昭和51年生まれだそうです。ということは、『昭和史の天皇』が終わった年なんですね。そういう意味で改めて考えてみますと、昭和天皇を視野に据えながら、昭和史あるいは終戦史をここまで書いた仕事、まとめた仕事というのは、一つの大きな転機だったのではないかと同時に、『昭和史の天皇』が始まったのは昭和42年の元日からですが、これはいくつもの幸運が重なってできたわけです。

では、全30巻の中で一体何がいちばん傑作だったのか。私もそうですが、いちばん最初の取っ掛かりの仕事をした、当時は社会部長だった辻本芳雄とよく話したのは、「そうだよな、松ちゃんよ、やっぱりいちばんの傑作は、書き出しの“天心の笑い”だよな。それから、やっぱり“日本の原爆”だな」と二人の意見が全く一致しているわけです。

「日本の原爆」については、日本で戦争中に原爆研究をやっていたということが、何となく噂として当時流れていたけれども、その実体は一体どうなのかということ、具体的に活字の上で世の中に最初に提示することができたものだったと思います。これについては後で話が出てくると思いますが、今年の春亡くなった京都大学化学研究所の所長をなさっていた清水栄先生と出会い、終始一貫うまいこといったわけですが、その清水先生が海外へ行くときには、角川文庫から出た文庫版の『昭和史の天皇』の一冊、「日本の原爆」を必ず持って行き、海外のアイソトープ関係の学者と話をするとき、これを配って歩くと。その一方で、シカゴ大学からこの本をくれという要請があって渡しておりますし、ドイツのどこかの大学にも行っているはず。それは、日本の原爆研究がどのような形で、一体どのような学者が関係して進められたのか、ここで初めてはっきり分かったからです。いまでも日本の原爆研究について語る場合には、これを抜きにし

ては全く語れないし、日本の原爆関係については、作家やノンフィクションライターがいろいろ書いておりますけれども、いま私がそれを読んでみると、かなり不満があります。それだけ実証的に自分で自信も持っておりましたし、「これが『昭和史の天皇』のいちばんいい作だな」というようなことだったわけです。

それなりにいくつもの大きな功績を昭和史研究の上に残したことは、たいへん幸いだと思いますが、そもそも『昭和史の天皇』は、どこからどういうことで始まったのか。それはこの前、僕が保存しておりました『昭和史の天皇』関係のテープを伊藤先生にお渡しした後でこちらへ一度来て、伊藤先生と武田さんのお二人の前で、思いつくままに話したものがああります。これをあるいは皆さんの中でお読みになった方がいらっしゃるかも……

伊藤 いや、いません。

松崎 いないんですか (笑)。そのときは全く急に「ちょっと話してくれよ」ということで、まことに粗雑極まる話でしたが、そこで話したことが大体の終始なんです。

それで、そもそもというのは昭和41年の秋頃のことですが、新聞社ではその翌年の正月から始まる新企画を、政府の予算ではありませんが、夏頃から社の幹部たちが、来年はどういう方法でどういうものをやるのか、徐々に決めていくのが長年のしきたりになっているわけです。そのときに、この方の名前はぜひ記憶しておいていただきたいのですが、当時の編集局長だった原四郎という人がいるわけです。この方は後に読売新聞の副社長として全編集の責任者になった、たいへんな傑物であるわけですが、私が後で聞いたところによると、その原四郎が編集局の幹部を集めて話した席で、こういうことを言ったそうです。新聞小説というのは昔、新聞を売る上で非常に大きなメリットを持っていたと。昔々のことを言うと、尾崎紅葉の『金色夜叉』も読売新聞の連載小説でしたし、吉川英治の『宮本武蔵』も朝日の新聞小説であるわけです。その新聞小説に力がなくなり、面白くなくなった。つまり、新聞を拡張販売する場合における役割は非常に薄くなっていた。そこで、新聞小説に代わるものは一体何か考えてみると。

その原四郎という人を我々は、「原チン、原チン」というあだ名で言っておりました。なぜそう言うかというと、“朕”というのは“天皇陛下”ですよ。原四郎は読売新聞における天皇陛下だったわけです。ところが、この原チンという人は、まことにスケールが違うんですよ。“煙管の殿様”という別名もありました。戦後は文化部長をやって、それから社会部長をやったんですが、僕が読売に入った当時は社会部長で、鞆を持って10時過ぎに出て来ると、その鞆を社会部長の椅子にポンと置いていなくなってしまうんです。どこへ行くかということ、夢の島にできた都営のゴルフ場へ行くんですね。それで、夕方になると帰ってくるわけですが、社会部ではいろいろ伝票があるわけで、社会部長の判コがないと言うことを聞かんわけですよ。その伝票を持ってウロウロ…ウロウロ待っていると、やおら来て、見やしないですよ、ただパンパン…パンパンッ！と押す。そこら辺はやっぱり昔の新聞記者というか、新聞社というのはある意味ではたいへんおおらかだったんですね。

たとえば、我々が一線の記者で地方に取材へ行くときには、必ず守ることが二つありました。それは、一流の旅館へ泊まれ、一流のものを食えという、これが我々兵隊に引き継がれる伝統だ

ったんですが、いまはみんな地方出張すると安ホテルに泊まって、「足代、足代」なんてこぼしていますが、そういうのがないおおらかな時代だったわけです。

それで、当時は原社会部長の下にデスクが7、8人いて、朝刊担当と夕刊担当に分かれて転がしておりました。デスクというのは、自分が当番の日の社会面の制作について全責任を負っているわけですが、トップ記事になる大きなニュースがない日というのがあるんですね。そうするとデスクは目を三角にして、厚生省だとか、警視庁だとか、国鉄だとか、各出先にいる記者に、「何かないか、何かないか」と電話がかかってくるわけです。「あっ、また何かないかと言ってきたよ」と。デスクはそのくらい胃がキリキリ痛むものなんです。そういうときに新聞を作るコツがあります。一つは、子供の話。その次は、お天気の話。それからもう一つは何かというと、動物の話。この三つをやれば必ず紙面は埋まるというんですね。僕も随分とお天気記事を書かされました。いまはゾンデをあげて高層気象を見っていますが、当時はそんなことはなくて、気象庁にはお天気相談所所長で大野さんという有名な方がおりましたが、この方がまた親切な方で、懇切丁寧に教えてくれるんです。僕がいまでも覚えているのは、ある寒い冬のときに、なぜ今年は寒いのか気象庁に行って聞くわけです。「寒いから寒いんだ、北極が冷たいから寒いんだ」と、こんな程度だったんですよ。それでもとにかく何とか記事にする。

そういうふうにいるいろいろやっております、私の社会部記者の経歴から言うと、いちばん最初は当然、サツ回りというのをやるわけです。いまのシステムは、実際に僕は現場に行ってみたことがないので分かりませんが、大きな警察に昔で言うサツ回り——警察担当の記者がたむろしていて、警察発表を自分で上手く書き、その裏付けを取るとか、警視庁ではまだやっているようですが、刑事たちに対する夜討ち朝駆けですね。だから、新聞社というところは車をたくさん使うんですが、どこがいちばん自動車代を使うかという、社会部なんです。というのは、いま時代が違って刑事たちは、一人は八王子に住んで、一人は千葉県の市川とか千葉市に住んでいるわけです。それで、八王子へ行って夜討ちをして話を聞いたら、その足で今度は千葉へ行って話を聞かなければならないわけでしょう。この車代がたいへんだったんです。まあ、いまでも社会部と政治部というのは、いちばん自動車代はかかっていると思いますね。

それでサツ回りをやってから、いまでも都民版というのがありますが、その都民版の記者をやって、それも電車に乗って全部行くわけです。いまだから何でも話していいと思うんですが、こういう新聞記者時代があったよということで聞いてくださいよ。僕なんかは、たとえば下町のほうを持たせられると、本所警察、向島警察、深川警察、城東警察の四つを持たされましたが、その四つにみんな、昔の言葉をあえて言わせてもらおうと、遊郭があるわけです。それで、「ちょっと覗いてくるか〜」なんて言ってそういうところを回ると、意外と面白いネタというか話も転がっていたものなんです。確か、向島にあった鳩の街もきょうで売春禁止法施行という、その最後の晩の話を半藤一利氏ですが、その日のメニューなんかも書いているのは彼も偉いと思う。ところが彼はね、我が中学——いまで言う隅田川高校、昔の府立七中の後輩なんですよ。それで、彼のお父さんは向島の区会議員だったんですね。

まあ、そんなことがありまして、都民版の次には、遊軍というのをやらされたわけです。僕が

初めて遊軍になったときは、社会部員が90人くらいおりました頃で、その中で遊軍として動いているのは12人だったんですね。遊軍というのは社会部にいつも座っていて、何かあったときには、「おい、事件があるから行ってくれ」とか、「きょうは何もないからお天気書いてくれよ」と言われるとお天気を書くとか、何でもこなす記者です。つまり、それが読めるだけの文章力を持っていると。いまでも遊軍という組織はありますが、いまの遊軍とはちょっとキャラクターが違うと思います。それで、「今度、松崎君に遊軍になってもらおうかな」と言われたときは嬉しかったですねえ。ということは要するに、いちばん若い記者でいて、一応の筆が立つということで遊軍に指名されたと。

その当時の遊軍には、我々より3年か4年先輩で、後に芥川賞を取った菊村到がおりまして、その当時から名文を書いていた。本間雅晴中将がフィリピンで処刑された後、あのモンテルパの刑場はなかなか見せなかったんですが、その後でオープンされたときに初めてモンテルパへ菊村到が行って名文を書いた。それから、尾崎罌堂の孫がいたり、それ相当な連中がいて文章を競っていました。

それで、遊軍をやっているうちに今度は文部省がたいへんな騒ぎになってきたんです。当時は勤評闘争と道徳教育反対闘争、それからもう一つあったかな……とにかく、これでもって文部省はひっちゃかめっちゃかになっているし、当時の日教組は左翼が強くて左翼一点張りだったでしょう。そしたら、その当時の文部省担当記者が、「俺、もう古くなっちゃって、こんなヘビーな仕事は一人でやってられないから、誰か若いの寄越してくれ」と言うので、僕が急遽行かされたわけです。文部省も教育の“きょう”の字も知らない、道徳教育も知らない、勤評闘争も知らないのがピョンと行かされて、いまでも覚えているのは、日教組の山形県上山大会で委員長を選ぶという、要するに、日教組の役員を選ぶ選挙と、道徳教育反対闘争、勤評闘争をどういうふうに持っていくのかというので、左翼が徹底的に大激論をやるわけです。

そんなところに行って、オタオタになってひどく悲鳴をあげたのと同時に、教育というのはこれでいいのか、教育とは違うぜ。我々年配の者が子供の頃に抱いた先生像というのは、子供は先生に教えられるけれども、先生がもっているキャラクターに影響されるところが非常に大きい。なんで日教組が教員は労働者だと言うの、教員はまず労働者の前に教員であるべきでしょう。そして、その裏に労働者があるのはいい。けども、何も知らない子供たちに教育の心を植えつけるとしたら、やっぱり教育というものは、教師というものの質の問題だろうと。いまその反作用がもろに出ているわけですね。それで僕は当時、小林武という委員長に、この人は非常に温厚な方でしたが、食ってかかって議論したことがあります。またね、新聞記者というのは、そういうときにやれるんですよ。

それで、上山大会は6月か5月にやったんですが、日教組が設営してくれた旅館へ新聞記者御一行様が泊まるわけですね。その旅館で毎日毎日、篠竹の芽を煮たやつばかり食わされて、糞詰りになってひどい目に遇いましたよ（笑）。

そんなことをやっているうちに、あいつに教育はもういい、駄目だと。そんなことでまた遊軍に戻されたわけです。それで、僕が都民版をやっているときにちょうど文化財保護法が、昭和

24年に例の法隆寺が焼けてからできたわけですが、そこでいままで国宝になっているものをもう一度、本当に国宝に値するのかわからないのか、全部チェックする作業を文部省でやりはじめたわけです。そしたら、「今度新しくまた国宝ができるそうぞ、お前なんか連載もので書けよ」と言われて、僕自身は日本美術が割合好きでしたが、これだって何も僕は学校で美術なんか勉強したことないですよ。新聞社っていうのは、そういうところなんですよ。

「お前やれよ、どうもリストはこれらしいぞ」と、そのリストをもらって、現在の文部省の上に当時の文化財保護委員会美術工芸課というのがありましたが、そこへヒョコヒョコと行ったら、いい先生と巡り合えたんです。取材する上で非常に重要なことはやっぱり、波長が合う人と合わない人がいることですね。そこでたまたま保坂三郎という先生と巡り合って、これが「新聞記者、大嫌い！」という先生なんです。もう一人、渡辺華山の専門家で有名な鈴木進という先生がいて、この人も東大の美術を出た人なんです。このお二人と仲良くなったわけです。

それで、美術工芸課では再指定の作業を上野の国立博物館の四階の大きな部屋で行っていて、そこに順次戦前の国宝を集めてきていて、見取図から何から全部さらいあげてきていたわけですが、その現場へヒョコヒョコと行って、「先生、これなあーに？ これどういうもん？」「バカッ！ 触るんじゃない」と言われるんですが、波長が合って仲良くなってくると、ものをまじかで見せてくれるんですね。

いちばん鮮烈な思いがあるのは、明治天皇はたいへん刀のお好きな方だったんですね。それで、刀の中でも名品中の名品が、備前長船の「大包平^{おおおかねひら}」という長い大刀ですよ。その大包平が岡山の池田家に代々伝わっていて、明治天皇が池田侯爵に、「ぜひあの大包平を見たいから持ってきて見せてくれないか」とおっしゃったら、「陛下、まことに申し訳ないけれども、大包平は一子相伝の我が家の重宝でございます。たつて陛下がご覧になりたいのであれば、どうぞ岡山へ来てご覧になってください」と言った大包平が来ていて、僕はごくま近かで拝見することができたんですよ。

それから、古代の豪族たちが亡くなると、墓誌を銀の板だとか、銅の板に彫って骨壺と一緒に入れるんですね。これを墓誌と言うんですが、鑿で字を彫るわけです。それで、「お前だから教えてやるけどな、贋物と本物の見分け方は、人間誰でも最初は、朝来て“やったるか”ってなときだから鑿は切れてるんだよ。ところが、やっているうちにだんだん人間というのは、悲しいものでだらけてくるんだよ。これを見てみなさい」とルーペで鑿の切り方を教えてくれるわけです。そしたら確かに違うんですよ。「これが贋物か本物かを見分ける本当のポイントだぞ」と、そういうふうな勉強をさせてもらったんです。これはまさに実物教育ですよ。国宝、重要文化財……重要文化財というのは戦後できた名前ですから、戦前から重要文化財というのはありませんが、旧国宝をそうやって仕分けしたわけです。そうやって本物の国宝、重要文化財に随分教えられました。

そしたら、皆さんどこかでお聞きになったことがあると思うけど、重要文化財に指定されていた永仁の壺の贋物事件があったんです。この経緯は本論ではないので省きますが、“日本名陶百選”ということで高島屋で展覧会があったときに永仁の壺が出たわけです。そしたら、保坂三郎

先生が僕をその展覧会に連れて行って、「松崎君、これをよーく見ておけよ。これはな、口付きが悪いよ。肩が張りすぎている。それから、胴の上と下とのカーブが駄目だし、こんな銘文は鎌倉時代には書かないよ。それから、釉薬が違うぞ」と。そしたら案の定、あれが贋物になったわけです。それで、あの問題がワーワーとなったときに、僕も後で記事を書きました。

それから、もう一つ、佐野乾山事件というのがあったんです。これも、贋物か本物かで大揺れに揺れたわけです。いわゆる乾山のものがバーッと佐野市から出たというんです。有名な尾形光琳の弟——尾形乾山の焼き物を、お茶人はみんなありがたがるんですよ。僕なんかは口が悪いから、いわゆる本物の乾山と言われているものは「これ、どこがいいの？」と平気で言うんだけど、お茶人には宝物ですよ。とにかく色の付いた焼き物が一挙に百点近く出てきたら、贋物だというのでワーワーとなったわけです。僕はいまでも本物だと思っていますが、社会部記者がそんなことをやって現を抜かしていたもんですから、「お前、ダメッ！」と今度は国鉄に行かされたわけです。昭和38年に“三八豪雪”というのがあって、日本海側の鉄道がズタズタになってしまい、これが1ヵ月くらいかかってたいへんで、当時の国鉄を担当していた記者がギブアップしてしまって、「お前、行け」という、また例の調子です。それと同時に、ちょうどオリンピックを控えて、羽田飛行場を拡張してきっちりするというので、「お前、飛行機もやれ」と。飛行機の“ひ”の字も知らないですよ、昨日まで佐野乾山で美術品を見ていたんだから。まあ、それも結構面白かったですよ。だから、僕はいまでも鉄道や飛行機については、それなりの一家言を持っています。

いままで美術品や何かをやったり、遊軍をやっていたのが、誰も新聞記者なんかいない羽田へ行って飛行機をやれ、鉄道へ行ってきりきり舞しろなんて、これは一種の左遷です。だけど僕が思うのに、そういうときにはそういう仕事の中で、何か面白い自分の波長に合ったものをみつけたらいいんじゃないかなど。僕は大体そういう考え方で、東京の下町の貧乏商人の倅だから、そういう気持ちが多分あったんでしょうね。それで、鉄道と飛行機をやったわけですから、いまでも飛行機関係の方を知ってるし、鉄道の人たちも知っています。

列車、電車はレールの上を走るわけですが、レールの上を走るときには、脱線しないために車輪につかえがいているわけです。あれをフランジと言うんですが、あのフランジの角度とレールの勾配、その摩擦係数の問題であれば脱線しないわけです。その関係が一体どうなっているのかとか、それから、電車の上に架線が張ってあるでしょう。あの架線はレールと平行して真っ直ぐ張ってあると皆さん大体そう思っているんですが、よく見てみると架線は千鳥の形で張ってあるんです。なぜかと言えば、架線というのは一本ですね。架線が張ってあるところから電気を取るために、車両の上にパンタグラフがあるでしょう。その上に銅でできたスライダーというのが乗っかっていて、その銅と架線が接触して電気が電車に入るわけです。そうすると、架線が真っ直ぐになっていたら、スライダーは必ず真ん中で凹んでしまうでしょう。こういうふうに（交互に）動いていないと、均等にスライダーは減っていかないわけです。

それから、鉄道の線路の上を見ますと、弁当箱の親方みたいなものが埋まっていますが、あれがATS——Automatic train stopper なんですよ。あれができたから、電車は何かあるとバツ

と止まるわけです。

それから、新幹線はどうやって止まると思います。あれだけ高速で走ってきた新幹線がどうやって止まるの？ ブレーキはどういうふうにするの？ 従来の電車は、必ず車輪の上に軟鉄で作ったブレーキが乗っかっていて、これでギュッと締めつけてブレーキがかかるわけですが、新幹線ができたときには、ブレーキをどうするかというのが最大の問題でした。そしたらある知恵者がいて、「羽田に行ってDC8を見ておいでよ」と。つまり、ジェット旅客機のブレーキはどうなっているのか。ディスクブレーキですよ。だったら、新幹線だってディスクブレーキを使えばいいよと。本当にこういうのはコロンブスの卵ですね。

皆さんお若いからご存じないと思いますが、昔の汽車でお便所はどうしていたかというところ、みんな垂れ流しで外へ吹き飛ばしていたわけです。ところが新幹線はそれが無い、全部溜め込みです。じゃあ、その溜め込みの容量はどれだけにするのか。東京から新大阪まで当時は最高時速2時間10キロで走ったわけですが、その間に一人がどれだけの水っぽいものを飲んで、何をたべて、どれだけ排泄するのか、全部計算したわけですが、そのもとになったのがDC8なんです。いまでもね、飛行機は上空でバツと便所は流しているんだと思っている人がいますが、あれは全部、貯タン式になっているんです。つまり、東京からホノルルまで行くのにどれだけの容量にしたらいいのか、全部計算して作ってあるので、それを参考にしたんですね。そういう意味では、いまの新幹線はDC8が一つの基本になっているんです。

きょうの話とは関係がないことを長々と申し上げましたけれども、これは僕が新聞記者として、サツ回りをやり、日教組を相手にやり、遊軍をやり、飛行機をやり、鉄道をやり、美術をやり、偏頗と言えば偏頗だけれども、そういうものの知識がインプットされた。社会部記者の中には、「俺は事件記者だ」と言っていて、ダーッと一直線で事件をやった記者もいますし、「俺は都庁の仕事が大好きだから都庁の仕事をやらせてくれ」と、都庁をずっとやった記者もいます。新聞記者というのは、そういうとぼけたところが多分にあるけれども、それが肥やしになっていると僕は思っているんです。だから、僕は国学院で講師をやらせていただいていたのですが、そのときも、こういうときにはこういう話をして、こういうふうに話を展開していったら学生たちも少しは分かるだろうと、そういうノウハウみたいなものは身についたわけです。実は、それが後になって『昭和史の天皇』をやったときに、みんな上手い具合に芽をふいてくれたと思うんです。

そんなふうにいるいろいろな仕事をやって、「飛行機もいい、鉄道もいい、あいつはもうそろそろあがりだな」と、そんなことを言っただけでも「青森県か岩手県の支局長にでも出すか」なんていう話もチラホラ聞こえてきたときに、これまた運命というのは分からないものですが、明治百年という大きなテーマが一つあったんです。明治百年については当然、各社とも連載ものをやるわけですが、連載ものをやるについては、それになりの下調べをします。それからもう一つ重要なことは、これは一つの転機になったと思うんですが、先ほど申しましたように、昭和41年の夏から秋にかけて、原四郎が何か新機軸を出した新聞小説に代わるものはないか考えたこと。そしてもう一つ重要なことは、昭和41年の5月何日でしたか、学士院の授賞式が例年あるんです。これには天皇陛下がご臨席になって学士院賞を授与されるわけですが、いちばん正面

の高いところにお座りになっている昭和天皇が居眠りをされたんですよ。これを当時の宮内庁詰めの記事が見たのか聞いたのか、そこは分かりませんが、密かに「昭和天皇が学士院授賞式のときに居眠りしたよ」「昭和天皇に何かあるぞ」ということでバナーと各社に緊張感が走って、その授賞式の後から、昭和天皇に万が一のことがあった場合、我々は口が悪いからよく言っていたのは、「天皇だって生き物だからいつかは逝かれるんだよ、これはいまのうちにちゃんと調べておかないと、何かあったら大変なことになる」ということで始まったわけです。あとから思うと陛下もうらうらとした陽気につい誘われたのではないのでしょうか。そのときに僕は、いっちょあがりだなんてことでちょっと暇でしたから、「昭和天皇のやっていたこと、つまり御事績を少し調べてみい」と言われたんです。これが昭和 41 年です。

それで、我々がいちばん最初に読むのは何かというと、『西園寺公と政局』です。どうもその本があるらしいから「まずこれを読まにゃあ、あかんあ……しんどいねえ、昭和史なんて腰を据えて勉強したことなんか無いのに」なんて言いながら、別の部屋には何人もいてそれぞれが仕事をやっていて、片一方では「明治百年やるからなっ、オランダ正月から始めよう」なんて格好いいことをやっているのに、いつ実のるかも分からない「昭和天皇の御事績を調べよ」と、なったわけです。

それで調べていて、それと同時に「さて、待てよ」というときに出てきていたのが何かというと、『木戸日記』です。伊藤先生がお作りになったのは昭和 41 年でしょう。

伊藤 昭和 41 年ですね。

松崎 あの『木戸日記』が昭和 41 年に出版されていなかったとするならば、『昭和史の天皇』はこんなに上手く転がらなかったと思いますし、もっと偏頗なものになったと思います。

それで、『原田日記』や『木戸日記』をパラパラとめくってメモを書いていたわけです。その一方、社のお偉方の間では、昭和 42 年から始まる企画を考えることになって、当時の社会部長や経済部長、いろいろな部長さんが集まり、ああでもない、こうでもないとやっていたわけですが、みんな考えあぐねてしまって、あれは確か昭和 41 年の 11 月頃だろうと思うんですが、これは又聞きですから確たることは言えませんけれども、原四郎という方は飛騨高山の人ですから話言葉に特徴があつて、「おまんらっちゃーなッ、何やっちゃるんじやッ！」こう怒鳴りつけて、「そうだ、社会部長、お前のところで天皇のことを調べているだろう。何か天皇でいけるんじやないか、それで調べてみい」と。それで、その会議の席から下りてきた社会部長の辻本芳雄が僕のところに来て、「おう、松ちゃん。お前、天皇のことを調べてたろ、何か書いてあるはずだな、それ見せえ」と言うんですよ。ところがこっちはね（笑）、いつか来るであろう天皇ご不例で、「何を書くのかなあ……」と思いながら、『原田日記』は満州某重大事件のことから始まりますから、「満州事変は——」なんて原稿用紙で 20 枚くらい自分の覚書に書いておいたかな。だけど、まあ、とにかく「これだけあります」なんて出したらパラパラと見て、辻本芳雄というのは大阪出身ですから、「おもしろくないなあー、これは」ってなことだったんです。

付け加えますと、原四郎という社会部長は、その後、編集局長になって、それから副社長になる方ですが、この方が関わったときに読売新聞は菊池寛賞を 3 回受賞しています。いちばん最初

は、新宿浄化のキャンペーンを張ったのが、第1回だった。それから、ビキニの原爆（第3回）。あと『昭和史の天皇』（第16回）という、そういう方です。

それで、ちょっと話が前に戻りますが、この原四郎という方は、さっき申しましたように“煙管の殿様”で、夕方になると判こを押して、煙のように消えるわけです。それでどこに行くかという、文春が当時は銀座にあって、文化人の溜まり場になっていたの、そこで彼はこうした人たちと飲んでいろんな話をする。そうすると、やっぱりそれなりのニュースが彼のアンテナに入ってくるわけです。そこで、「どうやら原子力というものはたいへんなことになるらしい」「アイゼンハワーが原子力の平和利用を世界に広げようという声明か何かを出すらしい」ということを原四郎は聞いてきて、「これは原子力というのをやりにゃーあかん」ということで、昭和33年に『ついに太陽をとらえた』という原子力の連載記事をやったわけです。これがたいへんな好評だったわけですが、これも原四郎のアンテナに引っ掛かったアイデアだったんですね。

しかし、当時その記事を書いた社会部の記者も原子力なんてさっぱり分からんわけです。それで、伊藤先生はご存じだと思いますが、防衛庁関係で非常に敏腕な堂場肇という記者がおりました。再軍備関係のドキュメントをたくさん書いていますが、これもやっぱり波長が合ったんでしょ、防衛庁の幹部の某氏から機密に属する資料をいくつも入手して、堂場文書という、これはいまだどこに入っていますかね？

伊藤 その辞典に書いてあります（笑）。

松崎 いまだこかの大学に入ってますよ。

伊藤 平和安保研に入っています。

松崎 青山学院ですか？

武田 移ったみたいですね。

松崎 まあ、その堂場肇なんかがいたわけですが、「堂場ちゃん、今度は『ついに太陽をとらえた』をやるから」ということで、その堂場肇と村尾清一という二人の記者に、いろいろ取材をやれと。それで取材はやっていたんだけど、わけが分からんわけです。そのうちに昭和29年の元旦から31回の連載で『ついに太陽をとらえた』が始まって、これはやっぱり非常に衝撃的ない企画でしたね。

そして、その1ヵ月の連載の途中に何が起こったかという、あのビキニの大スクープがあったんです。ということは、『ついに太陽をとらえた』を連載していて、社会部記者が素人なりに何となく原子力というものが分かってきていた。そこで、安部君という記者が焼津支局でキャッチしたビキニの第一報を流したら、本社でバーッと反応したわけです。これは各社全然知らないわけですよ。それで翌日の新聞では、こんなでかい見出しでもってやったわけです。僕なんかはあれを見て、「嘘じゃないの、これ」なんて思ったくらいの衝撃的な事件でした。まあ、これも『ついに太陽をとらえた』という連載が下敷きになってできた、世界的な大スクープだったんですね。

これなんかも連載記事が始まったときの話を聞きますと、もう元旦から連載が始まるということで、31日に「原稿できた？」と堂場肇の様子を見に行ったら、当時はそういう連載記事をや

るときには、近くの旅館の一室を借りて書いていたものですが、『僕はアトムである』こう書いたあとは、「うーん……」と呻吟して書けない状態だったそうです。そういうふうには社会部記者というのは、ある日とんでもないことをパッとやる。

それから、僕が『昭和史の天皇』をやっている終わりの頃にニクソン・ショックがありました。僕の部下の記者がその日たまたま泊まり番で、「ニクソン・ショックだ、何か社会面の記事を書けっ！」と言われて、経済部へ行って聞いたり、学者さんのところに電話して聞いたり、あっちゃこっちゃ走り回って、経済の“け”の字も知らないのに、ニクソン・ショックの記事を書いたんです。しかし、これはやっぱり窮余の一策ではないわけですが、何とか読者に分からせなければならぬんですから。

そんなようなことで、一方には明治百年があり、一方では昭和 42 年からの続きものを何かやらにゃあ、あかん。それで、どうやら天皇に何か肉体的な思わしくないようなことがおありではなかろうか。だから、学士院賞の授賞式でコックリをされたのではなかろうかという、それがそもそのスタートです。

そのうちにだんだん構想が上のほうで固まってきて、あれはやっぱり 11 月の終わり頃だったと思うけれども、社会部長の辻本が僕のところへ来て、「松ちゃん、来年からこういうことをやらなきゃならないんだけど、ひとつやってみてくれんか」と。それから、これはいろいろ問題がある言い方ですが、「日本でいちばん偉いのは天皇なんだ。その天皇が、日本にとって最大の悲劇と言ってもいいあの終戦、そしてあの戦争の時代をずっと経巡ってこられた体现者であるのだから、その天皇を中心として昭和の激動の時代というものが書けないか。まあ、わけが分からないけど、そういうようなこっちゃ。お前、ちょっと考えてみい」こういう調子ですよ。それで、天皇であるから当然のことながら、しきたりその他、全て宮内庁に関わっているから、宮内庁記者の星野甲子久というベテランと二人でやってみろと言われてたんです。

星野さんは、御年十六歳のときに無線関係で読売新聞に入社して、漢口作戦に行っているんですよ。新聞社っていうのはおかしいでしょう（笑）。その人が宮内庁詰めですつといて、その僕の大先輩と「お前、二人でやってみい」と言われて、「はあー、やってみいと言われてたところで困っちゃったね。じゃあ、まず俺はとにかく『木戸日記』を読みますから、一日、二日ちょっと暇をくださいよ」と言って、それから二週間、社に行きませんでした。それから毎日、家で『木戸日記』を読んでメモを克明に取って、この間そのメモもやっぱり出てきました（笑）。『木戸日記』は最初から最後までメモを取って本当に読みましたね。それで、うちのかみさんなんか、お昼になると「なに食べる？」ってな具合で、インスタントラーメンを毎日食って、これはよく覚えてます。それで、二週間経って読み上げて社へ行ったら、怒られた怒られた。「貴様、なにやっとなんだッ！」ってなことで目から火が出るほど怒られたけれども、後になってみると、二週間あれだけ打ち込んで『木戸日記』を読んだことが、やっぱり最大の効果を生んだと、いまでも確信しております。

そのような経緯で『昭和史の天皇』をやることになったわけですが、じゃあ、それを誰に書かせるのか。そこで辻本芳雄は、社会部の名文記者と言われた菊村到か、あるいはビキニのスクー

プをやった村尾清一かと考えていたら、原四郎編集局長が「ああ、そんなことは簡単じゃ、お前書け」と社会部を統括している現職の社会部長に言ったんです。そんなもんですよ（笑）。

この辻本芳雄についてご説明しておきますが、これは社会部の名文記者です。『昭和史の天皇』について書かれたもので非常に分かりやすいのは、『諸君！』の昭和 51 年 7 月号ですが、それをきょう持ってまいりました。ここに端無くも『昭和史を考えるヒント』という、伊藤隆・佐藤誠三郎・中村隆英先生の鼎談が載っておりますが、そこに辻本芳雄が『昭和史の天皇三十巻を読む』というのを書いているわけです。

それから、辻本芳雄は、中央公論の編集長だった何とか金次郎……

佐道 笹森ですね。

松崎 笹森金次郎氏と非常に仲が良くて、辻本芳雄は社会部長になる前に笹森さんと組んで、たとえば、モスクワ大学とか、ハーバード大学とか、世界の有名大学のことを書いたり、中央公論ではかなりいろいろな記事を書いているんです。それから、これはご存じだと思いますが、中央公論の『歴史と人物』昭和 48 年 12 月号に「戦後史への試み」という特集が組んでありまして、この中で「原爆製造に携わった人々」というのを辻本が書いております。その他にもあっちゃこっちゃ書いているんですが、辻本芳雄というのは読売新聞を代表する名文記者で、正力松太郎社主が亡くなったときの追悼文は、副社長だった務台さんが当然読んだわけですが、その原稿を書いたのは辻本芳雄ですよ。まあ、そのくらい名文家だったわけです。

しかし、昔はすごいんですよ、辻本芳雄は家が貧しくて大学は出てないんです。それで、当時は大阪で新聞発行してませんから、大阪の読売新聞社なんて支局みたいなものですよ。そこに、昔は“坊や”と言っておりましたが、アルバイトで入ったわけです。それで、大阪支社も人手がそんなにありませんから、忙しいときなんか「おい、お前、これちょっとメモしておいてくれ」なんて言われると、彼は上手くそれを書いて文章にした。それが目に留まって、「あらっ、書けるじゃないか」ということで、どの記事だったかな、何か書いたのが東京本社の目に留まって、大阪の坊やあがりの記者を東京にスカウトしたんです。これには原さんが関係していたと聞いたことがあります、すごい読書家でもありました。

それで東京へ来て、めきめき腕を上げて、終戦の一年半くらい前には、従軍特派員になってフィリピンに行き、レイテ作戦から彼は従軍記者で書いているんです。最もハイライトのところは、高千穂特別攻撃隊の出撃のところを彼は書いているわけです。ですから、『昭和史の天皇』でもフィリピンのところは、思い入れがあって彼が書いていますし、特攻隊第一号の関行男大尉が出撃する個所はひときわ心打つ文章になっています。

これは余談ですが、『昭和史の天皇』をやっているときに特攻隊の話になって、いまはつぶれてしまっておりませんが、クラーク基地のマバラカットという飛行場から出ていくわけです。それで『昭和史の天皇』に出てくるんですが、「マバラカットにススキの穂が揺れていた」というのがあるんですよ。これが泣かせる記事なんです、「冗談じゃないよ、フィリピンにススキの穂なんか生えてない」と僕はクレームを付けたんです。そしたら「バカやろうー！ 俺は従軍記者だったんだッ！」って怒られた、怒られた（笑）。それは彼にしてみれば痛切な青春の思い出

です。誠に涙なくしては語れないような状況の中で書いているわけでしょう。でも、新聞記者というのはそういうところがあるんです。

それから、辻本芳雄は社会部長になる前に、『ついに太陽をとらえた』のデスクをしておりましたが、その連載の途中であのビキニの大スクープがあったわけです。その当事者は、この辻本芳雄ですよ。現地の安部君から来た第一報を見て、「やややややッ！」と騒ぎ出して、辻本芳雄が全部書いたわけです。そのときの整理部長を僕は知ってましたけど、整理部長は「分かった！前の記事でつないでおいて最終版でこれはバーンとぶつける、大スクープだ、俺は一面全段空けて待っているからなっ！」と何もやらないんですよ。だから、地方へ行く新聞は前のつまらない記事のままなんです。これは新聞社のテクニックです。それで、こんな大きな凸版でしたが、最終版でバーンとそれをぶつけたわけです。まあ、辻本芳雄というのは、そういう意味での歴戦の強者であり名文家であったわけです。

それから、星野と僕が大喧嘩をしたことがあるんですよ。星野は「私は昭和天皇をウォッチして、昭和天皇を書くことを生涯の人生の定めと思っている」という昭和天皇絶対主義者ですよ。それに対して僕は、「これは天皇御一代記を書くの、そんなの俺は嫌だよ、俺は違うと思う」と、辻本芳雄が前にいて三人で侃々諤々とやって、「俺、やめた！昭和天皇だけを書く仕事だったら、俺は違うと思うから降ろしてくれ」と言ったんです。そしたら、辻本芳雄がそのときはちょっと深刻な顔をして「うーん……」と考えて、「あほう、行くところへ行こう」ってなことだったんです。それで、とにかくそのときに三人で喧嘩みたいなことをしながら決まったのは、「天皇は人間である。人間であるから、人間がいちばん人間の表情を持つときは、泣くときと笑うときである。それが人間だと俺は思うよ」と辻本芳雄が言った。「陛下だって必ず泣いたときと笑ったときがある、泣いたときはいつか」「あの終戦のときだよ、御前会議のときだというふうにももの本には書いてあるぞ」「じゃあ、そこからやろうよ」と。

それでは、天皇はどういうふうに笑われるのか。「俺は笑われることを知っている」と辻本芳雄が言うんです。というのは、いまの天皇が皇太子のときにエリザベス女王の戴冠式に随員特派員で行ってるんです。それは、日本が講和をして皇室外交が始まり、その第一号が、皇太子が船に乗ってアメリカを回り、それからイギリスに行ったわけですが、それには各社選りすぐりのエースを出したわけです。それで、昭和天皇は年に一度か二度、皇居の中に東屋みたいなのがありますが、そこで、那須の御用邸で記者団とお目にかかってお話をするんですが、皇太子がイギリスへ行ったときの随員記者については、天皇にしてみれば特別な思い出があるわけです。また、辻本芳雄たち新聞記者は、あちこちでいくつもちよんぼをやっているわけでしょう。だって、辻本は英語に弱い。だからあちこちでそれこそチンドン屋まがいのことをやっているわけです。そういうことを天皇に言うと、天皇はああいう調子で誠にほがらかな笑い方をするそうです。それを辻本芳雄に言わせると、「やっぱりあれは人間じゃないよ、あの笑い方はやっぱり違うよ」と。「辻本、あのときはどんな話があったの？」と陛下は割合ひらたく話をするわけですが、「こういう話がありまして……」と話すと、天皇は「ヘッヘッヘッ、ハッハッハッハッ」と笑う、これが人間とは違うと言うんです(笑)。それで、辻本芳雄が「笑うところは知ってるが、

泣いたところは知らん。まあ、わけが分からんけど、とにかくやってみっか」と。

そういうことで、「じゃあ、天皇が泣いた終戦のところから始めよう」「天皇が泣いたということは一億人が泣いたときだよ、そこから始めよう」と。それで始まったわけだけど、「じゃあ、何であるの御前会議というのはあるの、御前会議というのはどういう仕掛けなの？」こっちは分からんわけです。そこでまず、「あのときの会議に出席していちばん生きがいいのは誰だ？」

「迫水久常という書記官長がいたわけだろう、迫水に会おうよ」と。それで、これはいまでもよく覚えています、昭和41年の12月24日、クリスマスイブの夜ですよ。事前に国会議員の事務所に電話をして、「こういうことで先生にお話を伺いたいのですが」と言いましたら、彼は当時、郵政大臣で「24日の夜の10時なら世田谷区若林の自宅で会うから」と。

その世田谷区の自宅というのは、いまの環七に割合沿っているところで、僕はそこを知っていました。なぜ知っていたかという、僕が最初に社会部に入ったときにサツ回りで行かされたのが、世田谷、成城、北沢警察なんです。それで、世田谷警察に行くとウロウロしていると、当時はまだ鬱蒼とした樹木のある道がいくつもあって、いまではもちろんちゃんとしたお宅ですが、そこを通っていたら、回りに木立がたくさんある、いわゆる百姓屋的な家があったんです。誰が住んでいるのか近所の人に聞いたら、「あれは岡田啓介さんの家ですよ」と言われて、「へえーッ、昔の総理大臣はこんなお宅に住んでたの」というのが僕の記憶に残っていたんです。ご存じのように、迫水さんは岡田啓介さんの娘さんと結婚したわけですね。まあ、そんなこと言っただけで悪いけど、あまり美人さんではなかった。

それで、とにかく昭和41年の12月24日に星野と二人で行って、10時というアポイントで待っていたわけです。そしたら、彼は大臣ですから、いろいろ夜もレセプションその他あったんでしょう。帰って来たときは、ほろ酔い機嫌だったんですよ。それで、「君たち何をやるの？」と言うから、かくかくしかじかでこうだということで、御前会議の話をしていたときにいまでも鮮烈に覚えているのは、「責任内閣だからね」と。「えっ、責任内閣って何？先生、その責任内閣ってどういうものですか？」と聞いたのが、ある意味では昭和史の中における政治というかな、その仕掛けの第一歩が責任内閣制ということだったんですね。陸・海軍の階級だとかそういうものは、我々の時代は戦争の時代ですから分かっていたわけですが、「責任内閣って、先生、申し訳ないけど教えてくださいよ」と。そしたら、「こうこうこういうことだが、お前たち、こんなものも知らないでよくやれるな」と言われたことを覚えています。

それで帰ってきたわけですが、辻本は当時……まあ、僕がこういうことを言っているのかどうか分かりませんが、彼自身には戦争の傷跡というものがありましたからどうしても晩婚になるわけですが、読売新聞社会部のデスクということであれば、しかるべき嫁さんの話はいくつもあつたと思うんです。しかし、彼はもう一つ踏み切れなかった。だがどういふわけなのでしょう、これがまた変に女性本能をくすぐる酒豪でね、そこで高知の師範学校を出たちゃんとした方なんです、家がいろいろと事情があつて、彼女一人で東京へ出てきていた女性と波長があつて、彼は『昭和史の天皇』が始まる三年前に結婚して、子作りに励め励めで子供を作つた。しかし、奥さんは高知の師範学校時代、愛知県かどこかの勤労働員で来たときに肺結核を患つて、それが戦

後また再発したりなんかして、『昭和史の天皇』が始まる頃、つまり、昭和 41 年の暮れには、三度目の手術か何かで最悪の事態になっていたわけです。子供は四人いて、いちばん下の子供はまだおむつをしているし、おばあちゃん——つまり、辻本芳雄のお母さんがいる、奥さんが病院に入院していたので面倒を見なければならぬ、そういうときに、原チンに「お前、やれ」なんて言われて、それはもう惨憺たる状況だったんですね。

いずれにしても、『昭和史の天皇』のような連載記事にはプロローグを書かなきゃいかないので、出だしのところを書かなければならないと。それには彼は苦吟に苦吟を重ねておまして、あれは練馬に東京都が造った割合いい住宅でしたが、僕が確か 12 月 29 日にそこを訪ねたんです。そしたら、彼は革ジャンパーを着て、こっちのほうでは子供が寝ているわけですよ。酒豪ですから「酒が入らないと俺は駄目だから」と、ウィスキーのボトル半分くらいは簡単に飲んでしまし、靴のサイズは 28 センチでがっちりとした体の人でしたが、ガボッガボッとやっているコップを透かして見ると、汚く曇っていて向こうが見えないんです。その上、肴は冷や奴ですよ。そうやって、万年筆で原稿を書いては消し、書いては消して、夜の 8 時頃だったかな、「松ちゃん、できた、できたー！」って関西弁で言って、三編の原稿をポンと放り投げたんです。読んでみて、頭をぶん殴られるくらいに衝撃を受けました。これはぜひお読みいただきたいんですが、プロローグの“天心の笑い”というのは、新聞記者が書いた文章の中の名文中の名文だと思います。あのときは嬉しかったですね、さすが辻本芳雄だと。後々になっても辻本芳雄は、「やっぱり俺のいちばんの傑作は、あの“天心の笑い”だな」とよく言っていました。僕自身もそう思うし、ちょっと文章に慣れた人は、あれを読んでそれなりに感服しない人はいないと思います。やっぱり新聞記者が書いたものです。それを読んだときに、こういう方向で行くんだなということが僕も分かったんです。それで、とにかく終戦はやろうということで、「終戦への長い道（本土決戦と重臣の和平工作）」が始まるわけですね。

それから、これは後でテープの保存の問題と絡んできますが、新聞記事の保存・整理について、いちばんしっかりしているのは毎日新聞です。『一億人の昭和史』とかシリーズで写真集をたくさん出したでしょう、あれは保存がきちりしているからできるわけです。その次にしっかりしているのが朝日で、それには理由があって、以前はいまのプランタンが読売本社で、あそこの 7 階までだったかな、それは正力松太郎社主がなけなしの金で造ったビルでしたが、これが東京大空襲でまともにやられたんですね。20 年 5 月 25 日の空襲で焼けて全部パーになっているわけです。その後、築地の西本願寺を借りて新聞を作ったり、いまはヨドバシカメラになっているのかな、ビックカメラでしたか、有楽町そごうがあったビルに一時、本社を移してやっていたこともあります。有名な読売の争議は、現在のビックカメラのところでしたね。まあ、そういうようなことで、読売新聞は資料的にもたいへんきつい思いをした。戦争の惨禍というのかな、それをもろに受けた新聞社だったということも、ご記憶しておいていただきたいと思います。

それから、原四郎という人が素晴らしい編集局長だったことは申し上げましたけれども、戦時中は名文記者で鳴らしておまして、当時、報知を合併したことが読売新聞が大きくなる原因になるわけですが、そのときの連載記事に『征野千里』というのがありました。それを僕は一度、

読売の縮刷版で見ましたが、これはもう活字がひどいので読むのを止めてしまいました。広東作戦のことを書いていると思うんですよ。書き出しは「何かある、何かある、南の空に何かある」という、これも上手いもんですよ、ねっ。戦時中の広東作戦の雰囲気が出ているでしょう。これをいま書いたら、「なにこれ、バカじゃないの」と言われちゃうと思いますよ。だけど、新聞記事自体も時代を反映していますから、それがいい悪いは別にして、当時の社会部の名筆家が書いた記事は割合、そういう人間的な情感というものを大事にしてましたね。それは、さっき言ったように、何か記事がないときには、子供、お天気、動物、ということから想像していただければ何となく分かると思います。

そういう意味から言うといまの記事というのは、新聞のスペースが決まっていますし、活字の大きさもあるから、情感という点はみんなこそぎ落として、極端に言うと、ドライな事実関係を並べてあるようなところが多いような気がします。まさにね、「何かある、何かある、南の空に何かある」なんていうのは、現代の新聞文章と比べると、対極にある文章だと思います。そこでもう一度、プロローグの“天心の笑い”をご覧になっていただけると、文章の違いというものがお分かりになっていただけたと思います。

さて、こういうふうにして始まったわけですが、そのときに太っ腹な原四郎から、「金に糸目はつけるな」「どこに行ってもいいぞ」「判子は全部押すぞ」ということは言われました。それと、やるのは三人ですよ。そして、とにかくこれが30巻になるなんていうことは計算していないわけですよ。最初は「なあ、これが4月の天長節まで行ったらたいへんなこっちゃあな」なんて言ってたんです。だって、さっきお話した『ついに太陽をとらえた』が1ヵ月の連載で、これだって当時の連載記事から言えば破天荒な長さですよ。だから、とにかく終戦をやり、できるだけ季節に合わせてやって、昭和天皇のご誕生日——天長節まで行けば御の字で、そこまでもつかなど、そういうことで始まったわけです。

そして、「終戦への長い道（本土決戦と重臣の和平工作）」が始まるわけですが、ここで主なインタビューを見ていただくと分かりますように、ズラズラッとかなりの方の名前が出てくるわけです。たとえば、藤田尚徳さんは終戦時の侍従長で、当時安城市にお住まいになっていたのが僕が会いに行きましたが、世の中も世の中、時代も時代だと思ったのは、かつての海軍大将であり侍従長であった方が、県営住宅に住んでいたんですよ。その頃、もう九十一か二だったと思いますが、アポイントを取って行きましたら、どてらを着てね、入っていた炬燵からモソモソと出てきたんです。だけど、素晴らしかったのは、読んでいる本は英文のエラリー・クイーンで、「面白いぞ、エラリー・クイーンは」と言っていました。それから、いまでも鮮烈に記憶に残っているのは、「俺は年だよ、(手の甲の皮膚をつまんで放す) ほら、もう平らにならない、この年になるとこうなんだよ」ということです。それで、「なぜ元海軍大将、侍従長がこんなところに住んでいなければならないの？　なぜ宮内庁はこういうところを面倒を見ないの？」と変な憤慨を覚えたものです。

それから、なんとといってもこのときのハイライトは、木戸幸一元内大臣に会えたことです。

伊藤 それはテープに録音されているんですか。

松崎 それについてはいまお話しますが、「終戦への長い道（本土決戦と重臣の和平工作）」では当然のことながら、木戸幸一が出てこないわけがありません。それでまずやったのは、『木戸日記』を使いました。だって、このときにまず考えられることは、我々の仕事はあくまでも新聞記者の仕事で、新聞記者の仕事というのは、事実とぶつかって事実を事実として掘り起こすことです。だから、『昭和史の天皇』が後で一応の評価を受けるようになったときのことなんかは、全くそのときにはないわけです。極端に言うと、これは事件の一つで、自分の足で、自分の目で事実を確認すること、これが我々の記事なんだということで、あくまでも新聞記者の仕事だということから始まったわけです。そうすると、『木戸日記』を使って記事はとにかく作ったわけですが、これはアンフェアなことです。

それで、僕は2週間にわたって『木戸日記』を読んだ蓄積はありますし、「何とかして木戸さんに会いたい。でも、やっぱりあの方は偉すぎる、どう考えたってあの方から話は聞けないよなあ……」と思っていたわけです。そしたら、昭和41年の1月号だったと記憶しておりますけれども、『中央公論』の巻頭のグラビアで木戸さんが戦後初めて公衆の面前に姿を現したんです。ハンチングをかぶった写真でしたが、「はあー、木戸さんというのはこういう方か」と思って、自分なりのイメージはあったけれども、なんせ内大臣、そして『木戸日記』を読めば読むほど恐れ多くて、これは遙か高嶺の花ですよ。これには困りました。しかし、我々の仕事としては、会わないわけにはいきませんから、「どうしようかねえ、星ちゃんよ」と言うと、星野というのはまた「俺は昭和天皇」ってなほうですから、「そうだよなあ、木戸さんに会わなきゃいけないな」って。僕より遙かに先輩ですよ。さっき言ったように、漢口作戦に従軍したくらいの方ですから。

それまで、とにかく僕は、迫水久常、藤田尚徳、福留繁に会ってます。福留さんなんかは、「君が実際に間違いのないことを書いてくれるなら、いくらでもお会いして話しますよ」と言われて、非常に温厚な方だった記憶があります。東久邇さんは、代々木上原のお宅でお目にかかっています。確かあのときは白内障の手術をした後ということで、ほんの短い時間でした。それから、今井武夫さんはこの後でがっちり会っているんですね。とにかく、こうやってご覧になって分かるように、木戸幸一というのは、何としても欠かすことのできない人物。新聞記者の立場から言うと、何としても食いつかなければならない“餌”なんですよ。

それで、「困ったねえ、困ったねえ」というときに、あれは4月の何日でしたか、木戸さんにインタビューをした記事が載った前のお日にお目にかかっていることは間違いありません。これは縮刷版を見たら分かります。それで、これは僕の悪い癖ですが、朝お便所で大きいほうをしながらものを考える癖があって、そのときフツと「駄目もとだよなあ、やってみつか！」と思ったわけです。それから朝の9時過ぎだったかな、社へ出てきて、現在のプランタンの7階の上に掘建て小屋みたいな部屋が造ってあって、その“天皇部屋”というあだ名がついた部屋に行きましたら、まだ誰も来ていなかったんですね。それで、とにかく駄目もとだと思って、木戸さんの大磯のお宅へ電話したんです。そしたら、最初は奥さんが出て、「すぐ主人と代わります」と言って木戸さんが出てきたんです。ものすごく若い声でしたよ。そこで「実は、私は読売新聞で『昭和史の天皇』という連載ものをやっている松崎という記者ですが、一度ぜひお目にかかってお話を

伺いたいんですが、そういう機会を作っていただくことは可能でございますか？」と言ったら、「ああ、いいよ」って（笑）、これにはぶったまげましてね。「何だったらきょうでもいいよ」と、向こうからそう言われたときにはびっくりしました。「そうですか！ それでは、いま銀座におりますから、これから早速伺います」と言って、慌てて銀座の千疋屋に行きましたよ。あのとき自分でもよく持っていたと思うんですが、当時の千疋屋のメロンというのは桐の箱に入っていて、その一個一万円のメロンを二個とにかく僕の独断で買って、それを持って電車に乗って大磯のお宅へ伺ったんです。

そしたら、バラの花が咲いていて、ダックスフントがキャンキャン…キャンキャン鳴いてきてうるさいんですよ（笑）。ちょうどね、お金持ちの夏の避暑用の簡単な別荘というかな、そういうお宅だったんです。伊藤先生は行ったことがあるでしょう。

伊藤 行ったことがあります、そうですね。

松崎 それで、奥さんに「どうぞ、どうぞ」と言われて、庭に面したところがこのくらいの幅（1m50cmくらい）の廊下みたいになっていまして、そこに椅子があって、木戸孝允の三十号くらいの立派な油絵がかかっているんです。それを木戸さんは背にしてね。

それからいまでも覚えているのは、その前にね、あろうことかこれが木戸さんかと思ったのは、こうやって回す蓄音機が置いてあって、そこにレコードが入っていましたが、後でレコードを見てもみしたら、わけのわからない、いわゆる洋楽じゃない、変哲もないレコードだったんで奇妙な感じがしました。

そしたら木戸さんが、「君のところの仕事はよくできてる、僕は君のところのような仕事だったらいくらかでも話すよ、何でも聞いていいよ」という言葉がまず出てきたんです。その頃、「重臣の和平工作」ということで、近衛、東条、東郷といった人たちが上奏しているところはやっているわけですが、新聞記者というのはこういうときに極めて大胆不敵だと思ったのは、『近衛上奏文』を候文のまま使わないで、普通の文章に直したんです。これは後でもって林房雄がどこかの雑誌に引用していますから、林房雄のどこかに入っているかもしれません。まあ、こういう大胆不敵なことをやったわけですが、とにかく「君のところの仕事はいいよ。8月15日近くなるとな、新聞記者がこの家のことを聞きつけて、俺のところへ話を聞きに来るんだ。それで、俺がバラの手入れをやっていると、その新聞記者が“おじさん、木戸さんいるかね？”と聞くから、“ああ、木戸さんいないよ”俺はそう言って帰すんだよ。新聞記者は随分来るけど、みんなそんなもんだよ。だけど、君のところはこれだけちゃんと書いているから、俺は何でも話してあげるよ」と信用絶大です。それで、ただこっちは緊張して「はっ、はっ」とメモも取らずにその話を聞いておりました、このときはテープも何も持っていきませんでした。確か一時間くらい話を聞きましたかね。それで、「今後ともよろしくお願ひします」と言って木戸さんの家を出た後、木戸さんの家の枝折戸みたいな門のところまでバーッと、そのときの話を思い出しながらメモしましたよ。

一方、東京では、辻本芳雄と星野がいつものように入社してくる。それで、4月なかば頃になってちょっと仕事が忙しくなってきたので、二人ほど人数を増やしたんですが、辻本芳雄が「あ

れっ、松ちゃんいないな、どうしたの？」「松ちゃんはきょう木戸のところに行きました」「そう
かつ！ 俺はきょう書くところは止めた、待ってる」と何もしないで僕の帰りを待ち構えていた
んです。それで、僕が帰ってきてから、きょう聞いてきた話はこうで、木戸さんというのはこう
いう人で、意外と背の低いおじさんだったよと。だって、木戸さんの顔写真を見るとね、もっと
立派な颯爽とした方だと思いますよ。言っちゃ悪いけど、意外に背の低いとつき易い方でした。
伊藤 そうなんですよ (笑)。

松崎 それが内大臣ですもん。それでパーッとメモしたノートを辻本芳雄に出したら、「よし
っ！」とパーッとそれをその通りに書いたわけです。それで、最後の一行がまたドスーンと来た
んです。「この話をお祖父さんの木戸孝允が見おろしていた」というんですから (笑)。

とにかく、そうやって木戸さんに会ったわけですが、いま考えると、木戸さんが戦後初めて大
衆の活字メディアの前に登場したわけですから、これはやっぱりすごい事件だったと思うんです。
とするならば、新聞記事の手法として、あれはまず「木戸幸一氏語る」ということで一面にパー
ンと持ってきたほうが、新聞社としての効果は大きかったと思うんです。だけど、あまりにも嬉
しくてそこまでちょっと考えが行きませんでしたね。ただ、木戸さんがそういうふうにしたら、
「あの木戸さんが話したから俺も話してもいいよ」という空気がサーッと流れたわけです。それ
は非常に大きな波及効果だったと思いますね。

しかしその前に、何度も申し上げるけれども、昭和 41 年に『木戸日記』が刊行されたこと、
それを克明に読んだこと、これが運が良かったわけです。それから、木戸さんは当時七十三歳だ
ったのかな。まだ元気潑刺として、記憶力も非常に良い方で、後で『木戸日記』とちょっと違う
ことを聞くと、「君、それは日記と違うから、そっちのほうが違うよ」と言われるくらい記憶力
抜群でした。

そして、大島浩という記憶力抜群の人がもう一人いました。この人の記憶力は桁違いです。「そ
れは書いてあるほうが違うんだ、僕は記憶力がいいんだ」と自分でも言うんですよ。

それから、「陛下と特攻隊」という、この取り合わせもおかしいんですが、これは星野が宮内
庁で聞いてきた、陛下が侍従武官とごっつんこしたという話があるんです。それはどういうこと
かということ、特攻隊が出ましたということ、陸軍の吉橋戒三侍従武官が机を挟んで天皇にお話
したときのことで、天皇の前ですから軽く面を伏せる形でいたら、陛下がハーッと頭を下げられ
て、陛下の髪の毛と吉橋戒三の額がちょっと触ったそうです。それが“ごっつんこ”というふう
にオーバーになるんですが、そういうことがあったと。それで、「よーし、特攻隊やろう。陛下
がそれだけ特攻隊の散華した軍人たちに対してお心を遣われていたんだ、これはいけるぞっ！」
ということで特攻隊に行ったわけです。そしたら、特攻隊に行った人の生き残りが、ダーッとみ
んなこの記事のファンになるんですよ。それで、これがまた波及効果になって、「うちの親父は
特攻隊で行ってたんだけど、どこの特攻隊でどうだったのか分からなかったのが、これを読んで
初めて分かった」というのが出てくるわけです。

木戸さんのところへ戻りますが、木戸さんとしては、新聞社の仕事、その新聞社に対する無目
的的な信頼と、この取っ掛かりの仕事が、それなりに木戸さんの評価に堪えたことがあった。だか

ら、これは最終的なこととなりますが、『昭和史の天皇』というのは、読売新聞という機構があったからできたと思います。それから、やっぱり上層部の、ことに原四郎のこの仕事に対する熱意というか、判断の鋭さがあったと思います。それから、辻本芳雄の文章力があったこと。それから、我々としてはとにかく、言葉は失礼ですが、学者が書くものではなくて、新聞記者が事件として扱うものという心掛けで行ったのが、成功したのではなかろうかと思うんです。ですから、後になってよく「なぜこの仕事を文化部がやらなかったんですか？」と聞かれましたが、文化部の記者に仮にこれをやらせたとしたならば、まず本を読んで、理屈を立てて仕事をする。ところが、社会部の記者は「火事だぞ、行けっ！」というんで、とにかくわけがわからないで吹っ飛んで行って、「それなあに？」という、そここのところの違いだろうと思うんですね。だから、後になって辻本芳雄とも話しましたが、「やっぱりこれ、文化部でなくて良かったよね」と。

それともう一つ、これはたいへん手前味噌で失礼千万な話ですが、僕が何でもそれなりの好奇心があったから上手く行ったのかなと。それが、ある一方の思い込み的な好奇心ではなくて、いろいろなことをやって、はちゃめちゃな記者としての歩み方をしたために、相手に対してものを聞くツボというのか、これはやっぱり一種の修練だと思いますね。何となくいろいろなことをやっているうちに自ずから、物事のポイントはこれだなというのが無目的に体についていて、さっきの墓誌の鑿の切り方じゃないけど、ツボはここなんだよということと、最終的にはやることは人間なんだよという、そういうことを身につけていたことが、成功した秘訣じゃなかろうかなと思っっています。

それから、後で戦艦大和の話になるわけですが、最初は能村次郎がどこにいるか分からなかったんですよ。水交会に聞いても居場所が分からなかったわけですが、それが一体何で分かったと思います、電話帳ですよ。まず、能村というのはそんなにある名前ではない、能村でもって徹底的に調べてみると。これを担当したのが、前のオーラルヒストリーに出てきた谷崎です。それで、谷崎が能村をずっと電話帳で追いかけていたら、能村氏が伊東にいることが分かったわけです。電話帳で意外な人がパッと分かることが結構あるんですよ。だから、探偵社みたいなことを新聞社の力でいろいろやったわけじゃなくて、何のことはない、蓋を開けてみたら電話帳だったと。

陳公博のときもそうでしたよ。南京政府の主席だった陳公博が日本に亡命してくる。これを連れてきたのが、小川哲雄という後に拓大の理事もやった方ですが、当時は、新橋の駅を下りて一つ目の鳥居、いまは木村屋という時計屋があるでしょう。あの木村屋の2軒か3軒先の右側にあったビルで、台湾系の中国人がやっていた旅行社か何かに逼塞をして彼はいたわけです。これもね、小川哲雄という名前は分かっただけでも、どこにいるか分からないわけです。これが分からないと、陳公博が全然分からないわけです。それがピタッと分かったのが、やっぱり電話帳です。世田谷の深沢にいたんですよ。そしたら、小川哲雄氏がびっくりして、「よく私のところが分かりましたね」と言っていました。ですから、新聞記者というのは、あの手この手を知っているようでありながら、基本ラインというのはそんなにあるものではなくて、「待てよ……」とちょっと考えれば分かる。

それからもう一つ、これは後になりますけれども、僕自身「よくできたなあ」と思ったことな

んです。それは、終戦の8月15日にクーデターがあったでしょう。あのクーデターの陸軍の中心が、岩田正孝という軍務課の中佐ですよ。僕は『昭和史の天皇』でノモンハンを延々とやったわけですが、ノモンハンに行って散々っぱら痛い目に遇っているときに、とにかく大砲を持っていかなきゃ駄目だと。その国軍最精鋭の九六式野戦重砲を持っていたのは、市川にあった野戦重砲第三旅団で、防衛庁の戦史部には、そのときの旅団長だった畑勇三郎少将の回想録があるんですが、これはかなり克明で立派な回想録です。それで、その旅団が30何基の大砲を市川からノモンハンまで持って行くわけです。口径15センチのものすごい大砲ですよ。それをどうやって持っていったと思いますか。

ちょっと話は飛びますが、こここのところが、いわゆるオーラルヒストリーと、我々がやってきたオーラルヒストリーの違いだと思うんです。つまり、普通のオーラルヒストリーだと、市川の野戦重砲第三旅団が、国軍最精鋭の九六式野戦重砲を、はるばるノモンハンまで持っていったという事実関係は出てきます。ただ、どうやって持っていったかというプロセスは出てこないんです。どうやって持っていったと思いますか。

こっちはつまらないところに興味を持つんですが、それは零戦と同じですよ。零戦は、いまの三菱重工の愛知県の大江工場で作って、それを各務ヶ原で初めてテストパイロットが飛ばすわけです。では、あの名古屋の海辺にある大江工場から、岐阜県の各務ヶ原まではどうやって持っていったのか。飛ばして持っていったわけじゃないんですよ。これは『戦艦武蔵』を書いた吉村昭さんが書いて有名になった話ですが、あれは機体を一度分解して、それを牛車に乗っけて各務ヶ原まで延々と持って行って、各務ヶ原で組み立てたんです。世界に冠たる零戦ですよ。

それと同じようなことを、野戦重砲第三旅団から大砲を持っていくときにやったわけです。まず大砲を車輪から何からばらして、牛車に乗せて松戸駅まで持って行くわけです。そして、松戸駅でウィンチを使って貨車に乗せて、これを大阪の天保山埠頭まで持って行き、天保山から船に乗せて釜山まで持って行くわけです。釜山で陸揚げしたらまた貨車に乗せて、京義線ですっと朝鮮を縦断して満州へ行き、今度は満鉄線に入って海拉爾へ出て、そこから馬車に乗せてノモンハンへ大砲を持っていったんです。そんなことをやっているんですよ。だから、日本陸軍が物量で負けたということを考えるのには、この輸送のことを考えると分かると思うんです。

じゃあ、あなたは若いし、私の前にいるからお尋ねするけど、日中戦争が始まったときに、上海派遣軍は大苦戦に陥るわけです。当然のことながら物資を持って行かなければならない。大砲を持って行き、武器弾薬を持って行かなければならない。どうやって持っていったんですか。僕は大学生にもこういう質問をしたんですが、大体みんなが考えるのは、とにかく上海のそばまでは船で何とかして行く。そこからどうやって持っていったかとなると、大体若い人はみんなトラックで持っていったと思っているわけです。全部馬ですよ！

じゃあね、日中戦争の場合は、全部と言っていいくらい軍馬で運んだわけですが、あえてこういう言葉を使うけれども、日中戦争で日本軍が戦場で犠牲にした軍馬はどのくらいいると思います。

東 ……。

松崎 僕が知っている限り、そうした軍馬の霊をなぐさめているのは、ポピュラーな形では、靖国神社の遊就館の前に軍馬の銅像があるだけです。その他、部隊で軍馬をお祀りする会をやっているところもありますけど、公的な形で軍馬をお祀りしてあるのは、遊就館の前ただ一カ所です。

どれくらい倒れたと思いますか。これを聞くと僕は泣けてきますよ。『愛馬行進曲』じゃないけどね、300万頭ですよ！びっくりするでしょう。それが全部日本の馬とは言わないですよ。もちろん中国で徴発した馬もいますが、300万頭ですよ。

これがいちばん分かりやすいのは、井本熊男さんという軍人が書いた『作戦日誌で綴る支那事変』です。これを読むと、日中戦争が始まってすぐチャハル作戦というのが始まるわけですが、これは板垣征四郎中将の無謀な作戦で、北の山の方へ、チャハルの方へ行くときに、軍馬で物資を持って行くんですね。その現地を大本営参謀である井本熊男参謀が視察に行くわけですが、馬が鞍傷でもって怪我をして、野戦病院じゃないんですよ、野戦軍馬厩というのを作って、そこに馬が累々とながらついているという記事がありますよ。それが1,000頭いたっていうんです。

それから、同じく井本熊男さんの『作戦日誌で綴る支那事変』を読むと、「徐州、徐州と人馬は進む♪」という歌があるくらい有名な徐州作戦というのがありますが、その徐州作戦にも彼は現地視察に行っているんです。そうするとね、第一軍が通った道を彼が行くわけですが、「臭くて臭くて、たまらない」と言うんです。その嫌な臭いは、日本軍が殺した中国の兵隊の屍の臭いかと言うと、そうじゃない。軍馬が倒れて死んだ臭いが臭くてしょうがないというのが、井本さんの記録に出てきますよ。僕はそういう輪郭をくつきりすることも重要なことだと思っています。

もとに戻りますが、ノモンハンのときに大砲の積み出しで、当然これには人を付けていくわけですが、そういうときには、汽車の手配、兵隊たちが泊まる宿舎の手配、それらを先乗りして行く先遣将校が必要になります。それが畑勇三郎少将の記録によると、「岩田大尉をして先遣将校を務めさせる」と書いてあるだけで、岩田何とも書いてないんです。でも、僕は「これは彼だな」と思いました。「これはあの終戦のときにクーデターをやった岩田正孝だ、間違いないよ、調べてみる」と。それで調べてきたら、「間違いなかったです！」ということだったんです。

これは簡単なことです。というのは、陸軍の中の数ある将校でいながら各兵科でいくと、みんな歩兵がいちばんだと思っているんですが、実質的には砲兵なんです。砲兵は機械を使うから、理数科系統の将校でなければならないわけです。だから、頭脳明晰な将校である。それから、野戦重砲第三旅団という国軍最精鋭の砲兵旅団の先遣将校を務めるような軍人は、陸大を卒業しているはずだ。とすると、大尉であるから陸士の四十四、四十五期だったかな、大尉の位だとそのくらいだろうと。そこに岩田という将校がいるはずで、これは岩田正孝に間違いない、調べると。ズバーンと一発でしたよ。岩田氏は戦後電通に入りましたが、「何で俺がノモンハンにいたことが分かったの」とたいへん褒めてもらいました。

こういうのも、さまざまな経験を積んできた一つの功績だと思うし、そのことによってまた、岩田大尉からノモンハンでの砲兵戦での話がバーッと開けるわけです。ただ単なるお話ではなくて、彼しか味わえなかった、彼が体験をしたそのときの話が、パッと広がってくるんです。そう

いうところに僕は、オーラルヒストリーの意外な輪郭の部分の腰の強さというのがあると思うんです。

もうこんな時間になりましたから……

伊藤 それでは、ここで切りませんか。

松崎 ええ、ここで切りましょう。

伊藤 それで、一カ月の間を置いて9月にもう一度、この続きをお願いします。

松崎 ちょっと続きですが、このコピーは『新聞研究』の1976年1月号ですが、連載が終わって3ヶ月のときに新聞協会から、とにかく終わったのを書いてくれということで、まだ湯気が立っているときに僕が書いたものです。これが大体その当時の分かりやすい筋書きじゃないかなと思って、それをコピーしてきました。

伊藤 一つだけちょっと質問させてください。テープを使い始めたのはいつからですか。

松崎 テープを使ったのは能村次郎氏の時、つまり、戦艦大和の取材で谷崎が使ったのが初めてです。だから、もう5月に入っていたかな。

伊藤 最初はオープンリールですね。

松崎 そうです。『昭和史の天皇』では、お聞きした話をただ単なるメモ書きの書いたのでは、内容が信用できないと。だから、「あのね」とか「そうでね」という言葉の端々までをできるだけきっちり入れて、臨場感も合わせて出そうよという、無言のコンセンサスみたいなものが出てきたわけです。そしたらたまたま、谷崎がクラシック好きで、そのために彼はソニーが出した箱型のやつを買って持っていたんですね。それで、そういうような話の細かなニュアンスまでこれは記録ができるということで、彼が自分で能村次郎氏の取材に使ったのが初めてだったと僕は記憶しています。

伊藤 お預かりした中にたくさん木戸さんのテープがありますが、あれは最初ではなくて、その後ずっと続けられたものですか。

松崎 そうです、木戸さんの初っ端はメモだけでテープはないわけです。それで、2回目に行くときには能村氏の取材が始まっていて、取材はローテーションでやっていたから、そのときに使っていたのか。あるいは、これは僕の間違いで終戦時の参謀本部作戦部長だった宮崎周一中将だったかも分かりません。そのどちらかです。まあ、割合早い時期に、偶然に谷崎が自分の私用のものを使った。そうしたところ、ちょっと重いけれども、これは細かな話のニュアンスが正確に録れるということで、これを使おうよということになったんです。ただ、そのときはまだ読売自体も、テープの取材についての使用というか、活用の幅というか、そういうものが全く分からなくて、テープも買ってもらえないし、リールも自分で買ってやっていたわけです。

伊藤 えーッ！

松崎 それからしばらくしてから辻本芳雄が掛け合ってくれて、そして買ってくれたしたわけです。

伊藤 テープレコーダーも。

松崎 そうです。いま申しましたように、最初は谷崎が全く自分で持っていたものです。それか

ら、二台目は買ってもらったかな。それで、これは資材部で買ってもらうんですが、いろいろと資材部のほうも分からなくて、ゴタスタゴタスタあったような気がします。ですから、すんなりテープが使えるようになるまでは、それなりの苦労はあったわけです。それから比べるといまは天国ですよ。

伊藤 そうですね (笑)。実は、終わってから飲み会をよくやるんですが、いかがですか。

松崎 結構ですね。

伊藤 ただ、そこであまり話されると、「この前、話しましたよね」と言われるとちょっとまずいので、雑談をやりましょう。

松崎 そうですね。新聞記者という人類がどういうものであるかという雑談をしましょう。僕は両生動物的なところがあって、新聞記者でありながら学者的なところもあります。そういう意味では、結構お役に立てるのではなかろうかと思います。

伊藤 いやあ、これから大いに役立つだろうと思って、こういう場を設定したわけでありましてね (笑)。

それから、ご紹介しておきますが、さっきお話に出てきた今井武夫の息子さんがあの方です。

松崎 あっ、そうですか！ これはいろいろお世話になりました。

今井 四十六歳のときの子ですから、父親のことを知らないで、いま伊藤先生のところで親孝行というか、昔の親父のことを勉強させていただいておりまして、たいへんありがたく思っております。

伊藤 今井家から史料をお預かりしまして、彼が整理をしているんですよ。

今井 少しずつ勉強している最中です (笑)。

松崎 今井さんが防衛庁に残されてプリントされたものは随分ありますよ。

きょうはこんなようなお話しで、いくらかでもお役に立つことができれば、まあ、いままでこういうような話は、皆さん方にはおそらくなかったような話ではなかろうかと思います。ばかばかしい話と言ってしまうえばそれまでですけど。

伊藤先生、きょうお話ししようと思ったんですが、やっぱりやる前に相当な準備は新聞記者でいながらやったわけですよ。たとえば、盧溝橋事件。ひどいもので、7月7日に盧溝橋の“ろ”の字も新聞には出てきませんでした。それで、あのときあなたのお父さんはね……

今井 中国大使館付武官補佐官 (北平) でした。

松崎 そうなんです。それで、何をやってどうだったのか僕は全部チェックして、このとき現場にいた兵隊、僕が確認できただけで19人は全部当たっています。だから、その後でいろいろな方が、たとえば、秦さんの『盧溝橋事件』にも誰そのヒアリングなんて出てきますが、あのときのヒアリングはもうかなり作られているんです。生ではないと僕は思います。

(終了)